

清水正之先生のお薦め

***和辻哲郎『日本倫理思想史(一)~(四)』(岩波文庫)**

日本の思想史の通史として、浩瀚なものです。その思想史観にはさまざまな批判がありますが、哲学や倫理学の視点からの思想史としての古典的意味はなくなりません。ひとつの文化の総体がどのような意味をもつかというその発想、あるいは日本を対象とした哲学史の構想を、味わい、あるいは批判する、という楽しみがあります。

***丸山真男『日本の思想』(岩波新書)**

戦後の日本思想の一般の見方に一石を投じた書です。題名に比して、通史ではありませんが、近代日本をどうとらえ、それをどう反省するかという視点からの、日本思想の見方の座標をさだめようとしたものとして、なお意義は失っていません。日本思想や文化という問題に、生涯なんらかの関心をもつことになるだろう皆さんには、必読の書です。

***加藤周一『日本文学史序説 上下』(ちくま学芸文庫)**

上記の二つの思想史、思想史観は、丸山は社会科学的であり、和辻のものも、かなり堅い内容です。加藤周一のこの本は、文学や文学的感性をはずしては思想史をえがけないという日本の思想文化のありかたをうけとめ、文学を精神の歴史としてよみなおすものです。文学的感性をさらに、理知による見通しにかえて、私たち自身が文化状況とふれあうために。

***世阿弥『花伝書』(岩波文庫ほか)**

「道」という人生のとらえかたは、職人芸や芸道、武道にいまでも顕著であるとともに、日本の人間理解一生のとらえ方と深く関わってきました。世阿弥のこの書は、猿楽能の修業論として書かれましたが、人生一般の段階での心身からの自己理解、自己修養のありかたというものを、より深く考えさせるものでもあります。

***紫式部『紫式部日記』(角川ソフィア文庫)**

源氏物語をはじめとする平安女流文学の精神的背景を知る格好の日記です。自己のプライド、女性の生き方のむずかしさ、人生の憂愁、それらの間で揺れ動く心のありようは、現代の社会を生きていく女性に生き方と、決して無縁でも無関係でもありません。まずは抄出版・現代語訳を。

***本居宣長『うひやまぶみ』(岩波文庫)**

本居宣長が初学者にむけて、学問の要諦をろんじたものです。普通いわれているように、ナショナルな国学的思想を展開したとされる宣長ですが、その学問論は、案外に見通しの良い、同時に、学問というものが、生きることの意味と深く関わったものであることを、初学者にむけ、丁寧に説くものとなっています。

***内村鑑三『代表的日本人』(岩波文庫)**

過去の思想や文化をどのようにとらえ生かすか。明治の代表的なクリスチャンである内村が、西郷隆盛や中江藤樹など、江戸時代の人物を論評したものです。もちろん内村の作品は、「如何にしてキリスト信徒となったか」「後世への最大遺物」等、読むべき本は多くありますが、この書は、内村が、歴史的人物のどのような人間性に共感したのか、ということに関心を持ってよみすすめ

ると、歴史的な思想や人物に向かうということの意味、そして人間が生涯でなにに価値をおき、何を実現させようとしたかという問題を考えさせてくれます。

*鈴木大拙『日本的靈性』(岩波文庫)

後の柳田國男の日本のとらえ方の、ある基底的なものが古代からある、という文化観とは対照的に、禅思想家、鈴木は、日本の精神史を、個人の自覚、靈性の自覚の展開として描きます。日本人の宗教意識という問題を考え、あるいは反省することの手がかりとなる書といえます。

*柳田國男『遠野物語』(岩波文庫)

私自身は、こうした、共同体的な、原郷的ななつかしさをともなった世界をもっていません。そのことをときに寂しいと感じることがありますが、何か意味ある世界なのだと感じは持っています。日本というものへの、いわゆる民俗学的な関心を持っている人には、必読の書かと思いません。読む意味はあります。

*夏目漱石『私の個人主義』(講談社学術文庫)

彼の文学作品は、読み説くのにかなりの晦渋な面がありますが、評論そして講演では、きわめて明晰なモラリストとして語ります。所収された「私の個人主義」は、かれがなかなか自分の進む道を定められなかった体験をふまえて、自己本位という言葉を手にして、ようやく腰が定まったことをふりかえり、若い人に、つるはしを手を、自己の鉦脈を掘り当てるまでほりすすむことを勧めます。そのうえで個人主義には、相応の義務と責任がともなくことを、真正面から説き起こす、近代日本のもっとも重要な「モラル」を本質的な意味で説いた書の一つです。

*吉野源三郎『君たちはどう生きるか』(岩波文庫)

よくしられた作品です。戦前に書かれ、77年たった今も読み継がれています。コペル君という少年が、叔父さんの考えを知り、歴史を振り返りながら、人生を考えるという形式の作品です。社会の仕組みやその中での生き方を、コペル君が経験し、考え、おじさんノートでまとめていく。自分の人生を見通すために是非。

*酒井順子『儒教と負け犬』(講談社文庫)

一見軽い本とみえます。結婚しない女性のありかたを負け犬と言い表して、一世を風靡しました。結婚しない＝「負け犬」というありかたを、韓国、中国でも共通の現代的現象と知った酒井さんは、その理由をこの東アジアの共通の地盤である儒教に原因があるのではないかと仮説を立て、日中韓のルポルタージュ風にまとめています。儒教など縁遠いとおもっている人が多いかと思いますが、現代の文化の現象の淵源をたずねるとき、過去の文化的遺産をどうしても考察しなければ解けない、そうした重い意味を軽々と教えてくれる。皆さんの生き方の自覚にもかかわるものです。

清水均先生のお薦め

※最近の作家の才能には驚かされる。特に若手、その中でも女性作家はストーリー構造、リアリティにおいて非常にレベルが高く、いわゆる「近現代作家」として文学史に取り上げられる作家と比較した時に、いかに文学史が「政治的」なものであるかがわかる。

*原田マハの作品

この人の作品(小説)を一冊だけ取り上げるのは不可能。ただ、人の善良さ、沖縄、絵画、犬が

好きな人は是非、とは言っておきたい。少しだけ具体的な作品名を挙げておく。『旅屋おかえり』（集英社文庫）、『まぐだら屋のマリア』（幻冬舎文庫）、『楽園のカンヴァス』（新潮文庫）、『一分間だけ』（宝島社文庫）『カフーを待ちわびて』（宝島社文庫）、『風のマジム』（講談社文庫）。

*宮部みゆきの作品

「今さら宮部かよ！」という感じではあるのだが、ここはあえて。原田マハ同様にこの人の作品も一冊だけを取り上げるのはおよそ不可能。『ソロモンの偽証』『模倣犯』『理由』『火車』『レベル7』…キリがないのである。「あとは本屋さんに行って、自分の感覚で選んで！」としか言いようがないのである。

*朝井リョウ『何者』（新潮文庫）

この人の語る「言葉」は面白い。小説ではなく「語る言葉」である。無論小説も良いので一冊だけ挙げる。小説における「語り手」の機能に注目したい。全く恐ろしい。しかも「ツイッター」の言葉が絡んでくる。ご存知かと思うが映画にもなっている。佐藤健氏はきつとはまり役であろう。

*桜庭一樹『赤朽葉家の伝説』（創元推理文庫）

桜庭一樹といえば『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』というファンも多いだろうが、ここはあえてこの作品をピックアップした。「女性三代にわたる大河小説」ともいえる本作は、「小説で読む現代日本の歴史（1950年代～現在）」とも言うる。

*角田光代

・『八日目の蟬』（中公文庫）

映画もかなり良いが小説も良い、という評価がされる珍しいパターンの一つ。ただ、結末が異なったものとなっていて、どちらかという私的には映画の方が好きだ。ドラマにもなったが、好みで言えば、映画・小説・ドラマの順？

・『対岸の彼女』（文春文庫）

直木賞受賞作。語り手の一人である葵の高校時代の友人ナナコとの漂流場面、そして二人の別れと再会を綴った場面は、既に大学生となった皆さんにとっての「近い過去」として、その心理状況が非常に親しいものに感じられるかもしれない。

*恩田陸

・『夜のピクニック』（新潮文庫）

端的に「若いて、いい」と思わせる作品。「全校生徒が一昼夜に80キロを歩き通す」というそれだけの物語であるが、歩くという単調な行為だからこそ浮かび上がる登場人物一人ひとりの濃密な心理が見事に描写されている。

・『ネバーランド』（集英社文庫）

ミステリー要素を含んだ青春小説。男子校の寮を舞台とした「少年」たちの若さが非常に魅力的。少年をめぐる物語ではあるが、ある大人の女性にこの作品を薦めたら見事にはまってくれた。

*伊坂幸太郎『砂漠』（新潮文庫）

あまりにも「流行作家」すぎて恐縮であるが、それでも推薦図書リストには欠かせない作家。一作品を選ぶのは困難だが、その中で「一冊だけ」ということに限定すれば迷わずこの作品になる。いわゆる「青春小説」であるが、印象に残るフレーズ、心理描写における奥行の深さは、青春を過ぎた人間にも（だからこそ？）強く響く。

* 東野圭吾『手紙』（文春文庫）

いわゆる「感動もの」「感涙もの」と喧伝される作品はそれだけで敬遠してしまうものだが、「騙されたと思って」みた映画も、映画をみた後に読んだ小説も、それぞれに「涙」は避けられなかった。（それにしても、映画の主題歌小田和正の「言葉にできない」は＜反則＞だと思うが・・・）

* 重松清『きみの友だち』（新潮文庫）

「トモダチ何人できるかな」という世界とは対極の「人間関係」小説。「みんな」という得体の知れないものと訣別した「恵美」の「私はそばにいらなくてもいいのが友だちだと思う。」というひとことは重く、甘美ですらある。一人ひとりの人間の生の息吹に触れられるこの作品世界は、年齢を超えて生きることそのものに読者を導く。重松氏の作品を一冊だけ推薦するのは迷う。

#その他の重松作品：『その日のまえに』『幼な子われらに生まれ』『トワイライト』『ビタミンF』

* 山田宗樹『嫌われ松子の一生』（幻冬舎文庫上・下）

映画化されて話題になった作品であるが、映画も小説もそれぞれに高い「表現」レベルを獲得している。一人の女性の波乱万丈の一代記であるが、主人公松子の生き様は「なぜ、そうなる？」「なぜ、そうする？」という疑問符を呼び起こしながら共鳴してしまう危うい魅力に彩られている。#その他の山田作品：「黒い春」「天使の代理人（上）（下）」

* 山田詠美『ぼくは勉強ができない』（新潮文庫）

「勉強なんかできなくても〇〇ができる」、ではなくて「勉強が出来る人も出来ない人も〇〇ができる」ということがあったりする。「学校では教えてくれない大切な△△がある」、ではなくて、「学校に通う中で得られたりする貴重なもの」もたくさんある。「自分らしく生きる」ことがよくわからない、難しいと感じている人はこの作品を読んでもっと迷って下さい。山田詠美の作品も選ぶのに苦勞する。『放課後の音符（キイノート）』の透明感溢れる世界にも触れてほしいし、『晩年の子供』も味わい深い。個人的には『トラッシュ』が最高傑作ですが、「ちょっと勘弁して」という人も多いかもしれない。「勘弁してほしいけど、とりあえず読んでみようかな」という人は是非。

* ドストエフスキー『罪と罰』（岩波文庫上、中、下）

「おススメ」というよりも、「この作品を読まずに一生を終えちゃっていいのかな!？」という感じ。「罪」と「罰」は同義語なのか対義語なのかで悩んだのは太宰治の『人間失格』の主人公でした。ついでに「愛」の対義語は何でしょう？「憎悪」ですか？（「愛憎」という言葉もありますからね。でも違います）登場人物の名前を覚えられないのが難点ですが読破するだけでも価値がある。

* 茨木のり子『おんなのこぼ』（童話屋文庫）

たまには照れずに「詩集」なんてものも読んでみたい。「自分の感受性くらい自分で守ればかものよ」というひとことに「ばかもの」の私は思わずビクッとしてしまいました。先年亡くなった茨木さんの言葉は若い頃も年をとっても心に食い込んでくる。この詩人の言葉にもっと触れたい人は『倚りかからず』『現代詩文庫茨木のり子詩集』もおススメ。

* 乙一の作品

天才的なストーリーテラーと称される現代小説の旗手。どの作品を選ぶかは学生諸君が本屋さんの店頭でインスピレーションを感じて決めてほしい。

柳田洋夫先生のお薦め

*清水正之『日本思想全史』（ちくま新書）

タイトルにふさわしく、日本思想通史に関する決定版ともいえる著作。選択―受容―深化という視点から、テキストに即しつつ、随所に新たな知見が示される。たとえば、「愛山と透谷の論争は、・・・『公』と、内面に自閉していくことに自由を見る『私』思想との対立の一現象であった。しかしこの論争もむしろ、西村茂樹のいう『世外教』に触れた者同士によるものであったことは、近代日本の抱えた問題性を示していよう」という指摘は鋭い。自分の研究テーマを考えるためのよき指南書でもあるので、質・量ともに手強いが、とにかく一度通読してみしてほしい。

*森有正『いかに生きるか』（講談社現代新書）

ライフデザインに真っ向勝負のタイトルにふさわしい名著。すぐれた人生論であるとともに、卓抜な日本人論でもある。森有正はフランス文学者・哲学者でキリスト者であった。「信仰」と「経験」をめぐる深い思索に裏打ちされた文章をじっくりと味わってほしい。

*内村鑑三『代表的日本人』『基督信徒のなぐさめ』『余は如何にして基督信徒となりし乎』『後世への最大遺物・デンマルク国の話』（以上すべて岩波文庫）

内村鑑三は日本のキリスト者として最もよく知られている存在であり、日本思想史的にも重要な思想家・伝道者である。キリスト教主義大学である本学の日本文化学科に招かれた諸君には、ぜひ、西洋文明と東洋文明のエッセンスを一身に体現しているがごときこの人物の言葉を味わっていただきたい。

*C. S. ルイス『痛みの問題』（中村妙子訳、新教出版社）

『ナルニア国物語』で有名なC. S. ルイスのキリスト教入門書。人間の痛み、悪、墮落などの問題に即して、「キリスト教とは何か」について説得的に語られる。彼の著作集では他に『四つの愛』『キリスト教の精髓』もおすすめ。

*トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』（大沢章・呉茂一訳、岩波文庫）

世界中で聖書について最もよく読まれた書物（!）らしい。キリスト教において「良く生きる」とは、つまるところ「キリストにならいて」生きることである。この書を通して「キリスト教的生」の真髄に触れてほしい。

*聖アウグスティヌス『告白』（上）（下）（服部英次郎訳、岩波文庫）

不朽の名著の一つ。元不良のちょいワル教父アウグスティヌスがほんとうに「告白」したかったことは何であろうか？

*新渡戸稲造『武士道』（矢内原忠雄訳、岩波文庫）

「武士道」とは何かを考えるにあたって、まず読んでおかなければならない。さらに武士道について探求したいのならば、菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社現代新書）、そして『葉隠』（岩波文庫）、『甲陽軍艦』（ちくま学芸文庫）などにもトライしてみしてほしい。

*相良亨『誠実と日本人』（ペリかん社）

和辻哲郎に続いて「日本倫理思想史」という学問領域を拓いた相良亨は、この書において、「『誠実』ならばそれでよいのか」という問いとともに日本思想との対決を試みた。息詰まるほどに真摯な思索の凄みを体験してほしい。

***伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』(岩波文庫)**

まず、「近代日本における『愛』の虚偽」という、かっこよくも恐ろしいタイトルの論考から読むべし。「愛」をめぐるキリスト教と東洋思想のガチンコ対決。勝敗はいかに？

村松晋先生のお薦め

***クレア・キップス『ある小さなスズメの記録 人を慰め、愛し、叱った、誇り高きクラレンスの生涯』(梨木香歩訳、文春文庫、2015年、190頁)**

著者キップスは、生まれてすぐに巣から落ちたスズメの雛をひろい上げ、自分の手で養い育て、クラレンスと名付けていつくしみ、12年あまりの歳月を共に過ごしました。梨木香歩さんの丁寧な訳により、キップスのあたたかなまなざしとクラレンスのぬくもりが伝わってきます。私自身、小鳥が好きなこともあり、読むうちに心がなごむのを覚えます。

ところで本書は1953年にイギリスで出版されましたが、原題は*Sold for a Farthing*といいます。このタイトルにはどんな思いが込められているのでしょうか？キップスの問いかけを、聖学院に入った皆さんには、ぜひとも受け止めてもらいたいと願っています。

***丘修三『ぼくのお姉さん』(偕成社文庫、2002年、186頁)**

本書は表題作を含む6つの短編からなる作品集です。どの物語も、障がいを持つ人とその家族・友人との関係を、それぞれの「息づかい」のレベルから、こまやかに描き出している点で共通しています。「児童文学」に分類される作品だけに気軽に読めますが、読後感はきわめて重厚です。本書が問いかける問題群を、一人一人が〈自分の課題〉として受け止めてくれることを願ってやみません。

***大崎善生『聖(さとし)の青春』(講談社文庫、2002年、419頁)**

重い病と併走しつつ、29歳の若さで亡くなった「天才棋士」村山聖の生涯を、彼の心の軌跡に寄り添いながら、立体的に描いた作品です。生きるとはどういうことか、いのちとは何なのか、作品中にちりばめられた村山自身のことばを手がかりに、皆さん自身が考えてみてください。

***山田晶『アウグスティヌス講話』(講談社学術文庫、1995年、272頁)**

大学生になった皆さんに、求めることはただ一つ、自分の眼でものを見、自分の頭でものを考えるようになってほしいということです。「そんなこと、とっくにやっている」という人には、ぜひ、この本を読んでほしいと思います。予備知識は不要、「哲学すること」の本質を体感できる作品として、たぐいまれな一冊です。日本宗教史への言及も多く、この方面に関心のある人にも、おすすめです。

***アーネスト・ゴードン『クワイ河収容所』(斉藤和明訳、ちくま学芸文庫、1995年、473頁)**

「大日本帝国」として造型された近代日本のあり方を、思想的に問い質すうえで最適な作品と思われまます。太平洋戦争下、日本軍の捕虜収容所で、“地獄”を見たイギリス兵たちは、どうやって、人間としての再生を果たしたか、その「魂のドキュメント」を追体験してもらえれば、推薦者として、これに勝るよろこびはありません。

***奥田知志『もう、ひとりにさせない わが父の家にはすみか多し』(いのちのことば社、2011年、215頁)**

著者の奥田知志さんは、九州の東八幡キリスト教会で牧師をつとめています。ホームレス支

援の活動を続けていることでも知られ、かつてNHKの「プロフェッショナル」でも取り上げられました。私たちが、自己と自己を取り巻く社会とを批判的に問いなおし、他者と共に生きる途を考えていくためには、私たちの〈内〉に、何が必要なのでしょうか？本書に込められた奥田さんの呻き、そして、そこをくぐりぬけて立ち上がる〈よろこび〉を追体験するなかで、皆さん自身がつかみとってください。

熊谷芳郎先生のお薦め

***佐々木毅『学ぶとはどういうことか』(講談社、207頁)**

人間は「学び続ける動物」だと言われます。でも、「学ぶ」とはどうことなのでしょう。東日本大震災で「想定外」が多発しましたが、「想定」とは「学び」の中から作られるものだとするなら、大震災の津波は「学び」の成果を一気に破砕しました。そこからどんな「学び」を始めたらいいのでしょうか。「勉強」を超える「学び」について考えてみませんか。

***外山滋比古『知的生活習慣』(ちくま新書 1104、225頁)**

「知識尊重の思想が近代教育をおこした。学校は、知識の伝授に多忙で、生活が大切であることを忘れたか、それを考えようとはしなかった。」「いま、われわれはコンピューターにおびやかされて生きていると言ってよかろうか。知識をふやすだけでは、コンピューターに勝つことは難しいが、よい知的生活習慣を身につければ、何もおそれることはない。」これは、本書の「まえがき」の一部です。本書の面白さが既に感じられたのではないですか。大学生活を知的に過ごしたい人、いかがでしょう。同じ筆者による、次の著書もお薦めです。『忘却の整理学』(筑摩書房)、『ユーモアのレッスン』(中公新書 1702)、『人生複線の思想 ひとつでは多すぎる』(みすず書房)。

***廣野由美子『批評理論入門 「フランケンシュタイン」解剖講義』(中公新書 1790 235頁)**

小説の読み方には、2つの方法があります。1つは小説の内へ入っていく方法、もう1つは小説から外へ出ていく方法です。この本は、そんな小説の読み方を、メアリ・シェリー原作の小説『フランケンシュタイン』を読むことで解説したものです。大学で小説を学ぶ基礎を、19世紀の怪奇小説を読み解きながら学んでみませんか。

***尾崎真理子『ひみつの王国 評伝石井桃子』(新潮社 542頁)**

石井桃子という人を知っていますか？ 『ノンちゃん雲に乗る』などの童話の作者であり、『熊のプーさん』や『ちいさいおうち』などの翻訳者です。彼女は現在の埼玉県さいたま市浦和区常盤(当時は北足立郡浦和町)に生まれました。この本は、石井桃子という少女がどのようにして童話作家・童話翻訳者になっていったかを書いたものです。やや大部な本ですが、絵本や童話に興味のある方、ぜひ読んでみてください。

***脇明子『物語が生きる力を育てる』(岩波書店、182頁)**

現代は「物語」に満ちています。映像やゲームの中に、事件報道やうわさ話の中に「物語」はあふれています。それらの「物語」に踊らされている人も多い。そんな現代だからこそ、成長過程でどんな物語の本に出会うかはとても大切なことになる。この本は、物語との付き合い方や出会い方を解説したものです。童話や物語、読書に興味のある方、お薦めします。

***モンゴメリ作、村岡花子訳『赤毛のアン』（新潮文庫、524頁）**

孤児院からグリーン・ゲイブルスの老兄妹に引き取られたアン、新しい家族ができたことと喜んだのも一瞬のこと、老兄妹が求めたのは男の子だった！ そんな絶望的な環境の中で、アンは想像の翼を拡げながら明るく生きていきます。プリンスエドワード島の美しい自然と人々に囲まれたアンに、会いに来ませんか。

***ケストナー作、池内紀訳『飛ぶ教室』（新潮文庫、223頁）**

元気いっぱいの少年たちが学び暮らすギムナジウムにも、クリスマス・シーズンがやってきた。街全体が温かな雰囲気にも包まれるなか、寄宿学校の少年たちは、上級生と喧嘩をしたり、勇気を示すために梯子から飛び降りて足を骨折したりと大騒ぎ。クリスマス劇「飛ぶ教室」の上演はどうなるのか。クリスマスに帰省する旅費を工面できなかったマルティンは寂しくクリスマスを送るのか……。温かなメッセージが込められた、少年たちの物語。

***荻原規子『空色勾玉』（徳間書店、542頁）**

輝（かぐ）の御子（みこ）と闇（くら）の士族とが、激しく争う世に平和をもたらすものは？ 古代の日本（豊葦原（とよあしはら））を舞台に繰り広げられる、『古事記』とは異なるもう一つの神々の世界。

***梨木香歩『りかさん』（新潮文庫、251頁）**

おばあちゃんからようこにプレゼントされたのは黒髪の市松人形でした。ところがその人形は、人間と心を通わせることのできる人形だったのです。ようこは人形に導かれるままに、色々な人形と人間との思い出の世界に踏み込んでいきます。古い人形たちの心に残る、かつての持ち主たちの思いとは……。

***司馬遼太郎『坂の上の雲』（文芸春秋社 文春文庫（全8巻） 342頁（全巻ほぼ同様）**

坂の上に見える一片の雲が一人ひとりの幸せだと信じて、日本人が、日本という国がしゃにむに駆けた明治という時代、その時代が終わってからまだ100年もたつてはいない。明治とはなんだったのか？ 100年後に残したい本として第1位に選ばれた小説を、一度読んでみませんか。

木下綾子先生のお薦め

***西郷信綱『日本古代文学史』（岩波現代文庫、岩波書店、2005年←1963年）**

日本古代（文学史の区分でいえば上代・中古）における文学と思想の流れをダイナミックに描き出した名作です。文学史を単なる事項の羅列だと誤解している人にも、知的な興奮を味わいたい人にもおすすめです。さらに思想史に切り込みたい人には、同じ著者の『古典の影：学問の危機について』（平凡社ライブラリー、平凡社、1995年）を。

***大岡信『日本の詩歌：その骨組みと素肌』（岩波現代文庫、岩波書店、2005年）**

詩人である著者がコレージュ・ド・フランスにおいて行った、上代から中世の詩歌と詩人・歌人をめぐる全5回の講義録です。高度な内容ながら、丸みのある話し言葉で分かりやすく語られていて、格好の入門書といえます。言葉をつむぐことで思考を進め、深めていく、その鮮やかな手法も学べます。

***渡部泰明（編）・和歌文学会（監）『和歌のルール』（笠間書院、2014年）**

高校の教科書に載っている作品を中心に、「枕詞」や「掛詞」、「見立て」、「縁語」など、和歌を

もっと楽しむための10のルールが、10人の名人によってやさしく説明されています。和歌を初めて読む人から、すでにお気に入りの作品がある人まで、「こんなふう読み解けるんだ!」「心にしみる!」と、目の前が開けるような喜びを味わえることでしょう。とにかく面白いです。とにかく読んで。

***川村裕子『平安女子の楽しい!生活』(岩波ジュニア新書、岩波書店、2014年)**

平安時代のお邸(やしき)って? お手紙って? 恋ってどんなふうにしてたの? 文学作品に基づきながら、平安時代の暮らしを中学生からでも読めるやさしい文章で解説した入門書です。もちろん男子にもおすすめです。

***田中貴子『日本古典への招待:古典を楽しむ九つの方法』(ちくま新書、筑摩書房、1996年)**

主に中世文学を対象として、古典に親しむ方法を伝授してくれます。9章すべてが、マクラ(=導入/落語の用語です)から本編、下げ(=まとめ)まで面白くて、終わるのが名残惜しく感じます。講義する側としても勉強になります。

***齋藤希史『漢文脈と近代日本』(角川ソフィア文庫、KADOKAWA、2014年←NHKブックス、日本放送出版協会、2007年)**

近代以前の日本では、中国の古典(漢詩漢文)を自国の古典として学んでいただけでなく、みずから漢文で歴史書や法律書といった公的文書を記したり、創作したり、漢詩を作ったりしていました。それが幕末に西洋と出会い、洋学が盛り上がったことで、漢文は漢文脈=漢文訓読体として、さらに広い範囲で脈々と生き続けることになります。本著を読むと、近代や近代文学の違った側面が見えてくるはずですよ。

***堀川貴司『書誌学入門:古典籍を見る・知る・読む』(勉誠出版、2010年)**

あなたは、書物から何を読み取りますか? 書かれたことだけですか? もしそれなら、不十分です。どのように書写され、装訂されているか。注文主の身分や経済状態は? その書物を保存して伝えてきた歴代の持主や研究機関は? さまざまなメッセージを受け取ってください。

***木下是雄『理科系の作文技術』(改版、中公新書、中央公論新社、2002年)**

文章読本の決定版です。あなたは、事実と意見、感想、そして、他人の意見と自分の意見、これらを分けて書いていますか?あるいは、文体において個性ばかり追求していませんか? まずは自分の考えを相手に正確に伝える訓練をしましょう。個性はおのずと匂い立ちます。なお、本著で挙げられている理科系の事例に抵抗を感じる人は、同じ著者の『レポートの組み立て方』(ちくま学芸文庫、筑摩書房、1994年←1990年)を。ついでに、コミュニケーション技術全般に役立つ著作として、藤沢晃治『「分かりやすい説明」の技術:最強のプレゼンテーション15のルール』(ブルーバックス、講談社、2002年)を紹介しておきます。

***三島由紀夫『春の雪』豊饒の海1(新潮文庫、新潮社、2002年←1977年/新潮社、1969年)**

以下、私が大学生・大学院生の時に好きだった本を中心に。本著は長編『豊饒の海』の第一作で、ここで薦めるのには半端ですが、侯爵家と伯爵家の男女による道ならぬ恋という『源氏物語』の光源氏と藤壺を連想させるモチーフや、折々に挟まれる鮮烈で視覚的なイメージ、丹念に作り込まれた構成などは、三島の美の集大成という印象を与えます。この続きもぜひ読んでみてください。

***寺山修司『赤糸で縫いとじられた物語：寺山修司幻想童話集』（新書館、1979年）**

寺山というとアンダーグラウンド的な演劇活動や映画が有名ですが、この童話集には、彼の大胆なアイデアと抒情性、のびやかさが見事に調和されています。ほかにも、彼の詩や短歌、俳句はみずみずしく、心をつかまれます。『寺山修司少女詩集』（角川文庫、角川書店、2005年）、『寺山修司俳句全集』（増補改訂版、あんず堂、1999年）をどうぞ。

***須賀敦子『ユルスナールの靴』（白水Uブックス、白水社、2001年→『須賀敦子全集』3、河出文庫、河出書房新社、2007年）**

「きっちりと足に合った靴さえあれば、自分はどこまでも歩いていけるはずだ。そう心のどこかで思いつづけ、完璧な靴に出会わなかった不幸をかこちながら、自分は生きてきたような気がする」。著者が小説家マルグリット・ユルスナールの作品と人生、いわば足跡をたどりながら、自身のフランス、イタリア、日本における半生を振り返り、歩むべき道の定まらない苦悩とその意義とを見つめ直します。「魂の闇」にある人に。

***山崎まどか『乙女日和：12カ月のお散歩手帖』（アスペクト、2005年）**

最後に。大学生のうちにぜひ知っておいてほしい素敵な場所や建物、お店、映画などが、12カ月の風景とともに紹介されています。この本を持って街に出ましょう。センスのいいものに触れましょう。

黒崎佐仁子先生のお薦め

***リチャード・バック（著）、五木寛之（訳）『かもめのジョナサン完全版』新潮社**

1970年代のベストセラーに、Part4が追記され、2014年に完全版として刊行された。どの文章を、何と関連させ、どのように意味づけるかは、人によって違うと思う。是非、読んでみてもらいたい。

***Daniell Steel『SILENT HONOR』BANTAM DELL**

洋書だが、平易な英文であり、またラブストーリーであるため読みやすい。『無言の名誉』（アカデミー出版）という翻訳本もあるらしい。第二次世界大戦時、在米日系人は、どのような経験をしたのか。大和撫子を美しく描きすぎているが、そのようなロマンスの部分を除いても、読み応えは得られる。

***アリー・ジャン（著）、池田香代子（訳）『母さん、ぼくは生きてます』マガジンハウス**

日本の難民受け入れ問題を考えさせられる一冊。助けを求めて、日本にやってきた難民が、日本国内で地獄のような収容所生活を強いられている現実を知ってほしい。

***安田浩一『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』光文社新書**

現時点で、日本は移民を受け入れていないが、「外国人研修・技術実習制度」が制度化されている。しかし、その運用は適切だろうか。少子高齢化とともに、今後、移民受け入れについての議論も進むだろう。是非、日本の未来のためにも読んでもらいたい。

***アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『星の王子さま』**

子どもの頃に読んだことのある人も多いのでは？大学生になった今、大人の目で読み返してみよう。違った発見があるかもしれない。

***パウロ・フレイレ (著)・三砂ちづる (訳)『被抑圧者の教育学 新訳』 叢書**

教育に興味のある人には是非読んでもらいたい。

***平田オリザ『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』 講談社現代新書**

「コミュニケーション能力」というマジックワードに悩んでいる人には是非読んでもらいたい。

小林茂之先生のお薦め

***河合雅司『未来の年表—人口減少日本でこれから起きること』. 講談社現代新書 C0236. (講談社, 2017年)**

正直に言って、あまり直視したくない現実が列挙されている。遠くない将来、日本は危機に直面する。しかし、先を見据えることによって、現在とは別の社会に変革していくことができるかもしれない。学生の皆さんには、ライフプランを立てる上で読んでおくべき本である。

***プラトン 藤沢令夫訳『メノン』(岩波文庫 33-601-6)**

プラトン哲学を学ぶための最良のイントロダクションとされてきた短い対話篇である。この本のテーマは、「徳は教えられ得るか」であり、ライフデザインの目的とも関係が深い。人間はプラトンが「思わく」と呼ぶ生得的な知性を生まれながらに持っていることが示される。「生得的知性」の概念は、近代科学にも影響を与え続けている。

***ウンベルト・ユーコ 上村忠男・廣石正和訳『完全言語の探求』(平凡社ライブラリー750. 2011年, 1995年初版)**

18世紀に近代言語学は印欧比較言語学として出発した専門分野である。また、現代の理論言語学の主流は、1960年代のチョムスキーによって出発した。これらの近・現代言語学の発展には、「普遍言語」という思想が根底にあり、「普遍言語」(=完全言語)が旧約聖書中のバベルの塔伝説に始まる西洋思想史として論じられている。

***L・ウォーフ 池上嘉彦訳・解説『言語・思考・現実』(講談社学術文庫. 1993年)**

固有文化における言語の役割を論じた先駆的名著である。言語が思考様式を決定するという「サピア・ウォーフの仮説」はよく知られている。巻末の訳者による二篇の解説は、この仮説の現代的意義を再考する上で優れた論考である。

***ノーム・チョムスキー 福井直樹・辻子美保子 (編訳)『我々はどのような生き物なのか—ソフィア・レクチュアーズ』(岩波書店. 2015年)**

チョムスキーは、最も著名な現代の言語学者であるとともに社会評論家としても世界的に知られている。1950年代末、チョムスキーが提唱した生成文法は、人間の知性の本質を解明する壮大な企てとして発展した。この本は、2014年に日本で行われた講演の翻訳であり、聴衆との質疑応答も含めて、読みやすいので、一般向きに一読を勧められる本である。

***マーク・C・ベーカー 郡司隆男訳『言語のレシピ—多様性の中にひそむ普遍性をもとめて』(岩波現代文庫. 2010年)**

邦題は、パンとクラッカーはほとんど材料が同じであるが、小さじ一杯のイーストだけで大きな違いとなるという例えに基づく。言語の間の多様性もそれと同じで、見かけの違いは本質的にはわずかなものであるという「原理とパラメーター」理論に基づいて、日本語の例も豊富に取り上げながら、諸言語間の共通性と違いとが分かりやすく解説されている。

***ゲオルク・ノルトフ 高橋洋訳『脳はいかに意識をつくるのか』(白楊社, 2016年)**

チョムスキーは心と脳の問題は言語学で論じられるべきであると主張している。しかし、意識が脳の活動で生まれることは確かであるが、意識とは何かは脳科学・精神医学にとってハード・プロブレムであるらしい。例えば、認知は意識がなくても可能であることが論じられているが、それが正しいとすると、言語が認知と意識のどちらのレベルを反映するのか、といった問題を言語学に突きつけ、現代言語学は脳科学から見直しを迫られる。

***三浦俊彦『ラッセルのパラドクス—世界を読み替える哲学—』(岩波新書 975, 2005年)**

本書は、言語哲学および意味論の優れた入門書である。ラッセルの「タイプ理論」の解説は、言語学における意味論の基礎を理解するのに役立つ。タイプは日本語の「というもの」という概念に相当し、本書によれば典型的な「は」の用法はタイプを表す。

***アレックス・メスーディ, 竹澤 正哲 (その他), 野中 香方子 (訳)『文化進化論—ダーウィン進化論は文化を説明できるか』(エヌティティ出版, 2016年)**

この本は、言語によって急速に進化が可能になった文化について、最新の知見を文化の幅広い面にわたって、統合的に説明しようとする試みである。

***海部陽介『日本人はどこから来たのか?』(文藝春秋, 2016年)**

明治時代のチェンバレンから現代まで日本語の起源に関する論争が決着をみていない。大野晋のドラビダ語起源説はよく知られているけれども、日本語の起源は言語学的論拠だけでは解明し切れない。この本は、最新の人類学的研究に基づいて日本人の成立を説明しようとする壮大な試みである。日本語の比較言語学的研究にとっても刺激的である。

***ベーダ 高橋博訳『英国民教会史』(講談社学術文庫, 2008年)**

本書はイギリスの最初の歴史書である。5Cにアングロ人, サクソン人, ジュート人がヨーロッパ大陸から侵入し, それらの民族がイギリス人として統合される AD731 年までの歴史がキリスト教を軸に描かれている。イギリスや英語の起源を原著で学びたい人に。

***寺澤盾『英語の歴史—過去から未来への物語』(中公新書 1971, 2008年)**

語学としての英語に敬遠気味な人も, 最も日本人に身近な外国語について, 教養的な知識を楽しく学べることができる本である。この本で, 英語好きになった学生は多いと聞く。

***小林標『ラテン語の世界』(中公新書 1833, 2006年)**

本学のキャンパスで初めてラテン語で書かれた標語やラテン語の建物名に出会って, 驚いた新生も多いかもしれない。ちなみに, 大学祭に付けられた「ヴェリタス」(英語綴りによる読み)は「真理」という意味である。本書は, 日本におけるラテン語受容の歴史にも触れていて, 西欧の古典との関わりあいの中で日本文化を学びたい人に役立つ教養的入門書である。

***鈴木孝夫『日本語と外国語』(岩波新書 101, 1990年)**

無自覚的に使っている日本語の意味は, 外国語を通して文化的な違いが発見されやすい。例をあげれば, 太陽の色は英語では 'yellow' である。また, 「みかん色の猫」という誤訳?も興味深い。日本語や日本文化を相対的視点で見るために, 異文化理解の態度を養いたい。

***『文語訳聖書 詩篇付』(岩波文庫青 803-3, 2014年)**

聖書は, 各国語に翻訳された過程で, その国の言語文化に大きな影響を与えた。日本においても, 明治期に翻訳された『文語訳』は名訳とされ, 文学において近代日本語に与えた影響は少な

くない。特に『詩篇』は近代日本語の傑作とされる。

***石井美樹子『中世イギリスの女性たち』(大修館書店, 1997年)**

イギリス中世の女性としては、チャーサー『カンタベリー物語』の登場人物である5度結婚したバースの女房が有名である。実在の女性も含めて、彼女らが意外なほど、中世に生き生きと自立した人生を送ったことがうかがえることは興味深く、また驚きでもある。

***松木 武彦『縄文とケルト—辺境の比較考古学』。ちくま新書 1255。(筑摩書房, 2017/5/9)**

日本列島とブリテン島とは大陸からほどよく離れていて、大陸の文化を吸収しながら独自性を保ちながら文明を発達させてきた。イギリスのストーンヘンジは有名であるが、同様に日本の縄文文化にもストーン・サークルの遺跡があることに知的好奇心がそそられる。直接的な交流のなかった二つの非文明型文化が共通性をもっていたことは新鮮な論点である。

***川添愛(著), 花松あゆみ(イラスト)『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット—人工知能から考える「人と言葉」』。(朝日出版, 2017/6/17)**

これは一種の思考実験である。人間の言語を理解できる完全な人口知能はまだ実現されていないが、それを実現するためには、どのような点が困難なのであろうか。この本は、普段、私たちが無意識に言語を話していて気が付かない言語と思考について分かりやすく説明してくれる。

濱田寛先生のお薦め

○ 怒濤の長編小説

***クリスチャン・ジャック『太陽の王 ラムセス』～『ラムセス再臨』(角川文庫・全9冊)**

エジプト史上、最も偉大なファラオと呼ばれたラムセス二世の生涯を描く前半5巻と、ラムセスの晩年を王墓建築の職人たちの視点から描いた後半4冊。倒れる前に読み終わるか、読み終わる前に倒れるか。

***スティーヴン・キング『ダーク・タワー』(新潮文庫・全16冊)**

中間世界の最後のガンズリンガー(拳銃使い)、ローランドの「暗黒の塔」探索の旅。執筆に三十年かかったという圧倒的な物語世界。ファンタジー・マニア必読。ローランドに逢いたい。尚、同じくキングの長編『ザ・スタンド』(文芸春秋・2冊/文春文庫・5冊)も興味深い。邦訳初版のコピーは「20世紀の死に様」。

***羅貫中『三国演義』(岩波文庫・全8冊)**

後漢末の群雄割拠から晋の統一までを描く。マニアは正史『三国志』(ちくま学芸文庫・全8冊)も併せ読むべし。吉川英治『三国志』(講談社文庫・5冊)は羅貫中『三国演義』の忠実な翻訳ではないものの、是非、通読したい。『三国演義』DVD全84話(3840分)を完備すれば合格である。

***池上永一『テンペスト』(角川書店・全2冊)**

幕末の琉球を舞台としたファンタジー。本文には漢文・候文・琉球語・琉歌・英語などさまざまな文体が用いられ、今までにない読書体験を得られるでしょう。同じ作者の『レキオス』(角川書店)、『バガージマヌパナス』『風車祭』『ぼくのキャノン』(文春文庫)へと読書が進むに違いない。浅田次郎『蒼穹の昴』『珍妃の井戸』を併読すれば、次に進むべき書物は、三田村泰助『宦官—側近政治の構造』(中公新書)に決定です。

***グレゴリー・ディヴィッド・ロバーツ『シャンタラム』(新潮文庫・全3冊)**

ストーリーは紹介しません、文庫本の帯に記されたジョナサン・キャロルの言葉に尽きるでしょう。曰く「読書人ならば誰しもずっとこの作品を求めてきた。読破して心を動かされない者は、冷酷かすでに死んでいるか、あるいはその両方だ。」本作品は一气呵成に読むのがお勧めです。ゴールデンウィークあるいは夏休みの至福の一時となるでしょう。

○ 番外編

***高野秀行『幻獣ムベンベを追え』(集英社文庫)**

著者が大学生の時に所属していたサークル「探検部」での体験を綴ったもの。こんな大学生時代を過ごした人たちがいたことにジェラシーを感じて欲しい。レドモンド・オハンロン『コンゴ・ジャーニー』(新潮社・2冊)も併せて読むと楽しさ倍增。

***赤瀬川原平『超芸術トマソン』(ちくま文庫)**

平成生まれの学生諸君は「超芸術トマソン」のブームを知らないであろう。本書を読むとこれまでの「町歩き」はできなくなるに違いありません。トマソン物件を発見したら、「報告」を濱田研究室まで届けて欲しい。尚、「報告」の体裁は、本書に従います。

松井慎一郎先生のお薦め

***河合栄治郎『学生に与う』(桜美林大学北東アジア総合研究所)**

初めての大学生活に戸惑うことも多いと思います。大学とは何か、学生とは何かなどの根本的な疑問から、講義や試験の受け方、はたまた友情や恋愛などについて具体的な解答を求めている人にお薦めなのが本書です。76年前(1940年)に出版された当時、ほとんどの大学生が読んだといわれています。人生の目的を、金儲けでも立身出世でもなく、「人格の陶冶」にあると言い切る力強さに、戦時下の生活に絶望していた多くの学生・青年が、勇気と希望を与えられました。人生の指針を求めている人に是非読んでいただきたいです。原文が読みにくいと感じる人には、現代語訳版(河合栄治郎研究会編『現代版 学生に与う』桜美林大学北東アジア総合研究所)があります。

***佐原真『遺跡が語る日本人の暮らし』(岩波ジュニア新書)**

弥生土器研究の第一人者で達意の文章を書くことで知られた考古学者が若い世代に向けて書いた本です。我々が普段の生活のなかで常識だと思っていることが、実は、人類の悠久の歴史という観点から眺めた場合、特殊な事例だということがあります。戦争が、人類の誕生と同時ではなく、農耕社会の成立(日本においては弥生時代)をもって開始されたとの指摘は、我々がやがて戦争を廃止することができるとの希望を与えてくれます。

***阿部謹也『自分のなかに歴史を読む』(ちくまプリマーブックス)**

若い世代に向けて書かれた、我が国を代表するドイツ中世史研究者の自伝。著者の生い立ち、学生時代のエピソード、歴史家にいたった経緯などが平易な文章で語られています。大学時代の卒論のテーマについて、著者が上原専禄教授から受けた、「どんな問題をやるにせよ、それをやらなければ生きてゆけないというテーマを探すのですね」というアドバイスは、卒論ひいては将来の方向に悩むすべての学生に大きなヒントを与えてくれると確信します。

***加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』(朝日出版社)**

日本近現代史研究の第一人者が高校生に向けて行った講義を文章化したもので、大変読みやすい本です。誰もが嫌がる戦争の道を、明治から昭和の前半にかけての日本人が突き進んでいったのはなぜかという日本近現代史における最大の疑問をあざやかにわかりやすく解いていきます。

***夏目漱石『漱石書簡集』(岩波文庫)**

漱石が生涯に残した手紙約 25000 通のうち 158 通を収録。弟子たちに宛てた手紙から、漱石が偉大な「人生の教師」でもあったことがわかります。とくに、久米正雄・芥川龍之介宛の「牛になる事はどうしても必要です。われわれはとかく馬になりたがるが、牛にはなかなか切れないです。(中略) あせっては不可ません。頭を悪くしては不可せん。根気づくでお出でなさい。世の中は根気の前に頭を下げる事を知っていますが、火花の前には一瞬の記憶しか与えてくれません。うんうん死ぬまで押すのです。それだけです」との一節は、あせって結果を求めがちな若い皆さんに再考を促すことでしょう。漱石書簡の魅力をわかりやすく解説したものに、出久根達夫『漱石先生の手紙』(講談社文庫)があります。

***福沢諭吉『福翁自伝』(岩波文庫)**

新井白石の『折たく柴の記』とならぶ我が国自伝文学の最高傑作。慶應義塾の創立者が、数え年 14,15 才にしてはじめて学問を志したという事実は、晩学がけっして人生のハンディキャップにならないことを教えてくれます。「遊女の贖手紙」の話は、漫画家・手塚治虫のご先祖様の女好きや福沢の酒好きが知れて面白いです。現代語訳として、斎藤孝編訳『現代語訳 福翁自伝』(ちくま新書)があります。

***安田喜憲『生命文明の世紀へ』第三文明社**

環境考古学の立場から現在の大量生産・大量消費社会のあり方に警鐘を鳴らしています。このままの勢いで大量生産・大量消費を続けていくと、地球温暖化が深刻なものとなり、2070 年には現代文明が崩壊すると予測しています。未来のために我々が今できることは何であるのかを考えさせる一書です。

***広井良典『人口減少社会という希望—コミュニティ経済の生成と地球倫理』(朝日選書)**

人口減少社会への推移が将来の日本に絶望ではなく希望をもたらすものであると説く目からウロコの本。明治維新以降、西洋列強に対抗して、拡大・成長を目指し人口を増加させてきたことが、実は、日本の長い歴史のなかでは異常な現象であり、そうした無理に無理を重ねてきた結果、様々な社会問題が現出していると指摘しています。今後の人口減少傾向は、「本当に豊かで幸せを感じられる社会をつくっていく恰好のチャンスあるいは入り口」であると未来への希望を説いています。

***趙景達『近代朝鮮と日本』(岩波新書)**

近代における朝鮮と日本の関係を政治文化の相違という観点から解き明かした本です。韓国に関心のある人、なぜ韓国人は日本を嫌うのか等の疑問を持っている人にお薦めの書です。日本では伊藤博文の暗殺者として知られている安重根に関しても多様な観点から論じています。同じ著者による続編に『植民地朝鮮と日本』(岩波新書)があります。こちらも併せて読まれることをお薦めします。

***芳賀綏『威風堂々の指導者たち』(清流出版)**

今夏から選挙権年齢が 18 歳に引き下げられ、一年生の皆さんも選挙に参加できるようになります。最初の投票では何を基準に選ぶべきかと悩むことでしょう。政治家の最大の魅力を政策や政見ではなく、その人間性にあると指摘しているのが、本書です。吉田茂、石橋湛山、西尾末広、芦田均、河上丈太郎といった戦後活躍した 5 人の大物政治家を取り上げています、政治家の不祥事やポピュリズムの台頭が目立つなかで、信念や気骨というものを持っていた彼らから学ぶべき点は決して小さくないでしょう。

横山寿世理先生のお薦め

***荻谷剛彦『知的複眼思考法——誰でももっている想像力のスイッチ』(講談社)**

著者が言う「複眼的思考」は、大学生のあいだに、ぜひ身につけて欲しい思考法です。「複眼的思考」とは「複数の視点を自由に行き来することで、ひとつの視点にとらわれない相対化の思考法」だと説明されています。生きづらい現代を生き抜くための力を養ってくれる一冊だと言えます。

***茂木健一郎『意識とは何か——〈私〉を生成する脳』(ちくま新書)**

私たちが見たり、聞いたり、触ったりして立ち現れる表象の世界において、意識はどのように生まれるのかを、脳科学者である著者は教えてくれます。「同じ」と「違う」はその性質によって決まるのではなく、それらを意識するプロセスや文脈によって決まります。だからこそ、他者との関係性の中で同一性を保ちながら変化する私(=自分)の生成を捉えられるのです。「物質である脳と、その活動に伴って生まれる心との関係を問う」心身問題を取り扱った一冊です。

***森真一『ほんとはこわい「やさしさ社会」』(ちくまプリマー新書)**

本書では、現代社会における他者に対しての「やさしさ」が変化することで、その新しい「やさしさ」ルールを守ることが非常に難しくなり、人びとを苦しめていることを説明してくれています。この新しい「やさしさ」は、「上から目線」から逃れて他者と対等であること、相手を傷つけないことを指します。特に入学したばかりの 1 年生には考えて欲しい問題を扱っています。

***山田真茂留『〈普通〉という希望』(青弓社)**

組織社会学、集合的アイデンティティ研究をしている著者による「普通」さを社会的に問い直した、少し難しい本です。社会学は常識や「普通」さを疑う学問であると言われるますが、そもそも近年「普通」が多様化して、麻痺してしまっているとしたら、社会は成り立たなくなってしまうという危機感に本書は支えられています。著者は、「普通」という幻想を疑いながらも、社会に生きる当事者の立場に立つことを論じています。

***児美川孝一郎『若者はなぜ「就職」できなくなったのか?——生き抜くために知っておくべきこと』(日本図書センター)**

これまた「複眼的思考」に支えられた一冊です。この複眼的思考は、若者(大学生)が直面する就職難を乗り切る生き方を教えてくれるはずですが、安易に学卒就職を鼓舞するものではなく、「競争乗り切り型の、上昇志向型の生き方とは異なる道をすすみたいと思う人たちにも、それはそれで幸せな生き方ができるような社会のあり方」を模索しています。

***谷本奈穂『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』（青弓社）**

若者向け雑誌、その雑誌の恋愛記事（アンケート結果やインタビューなど）や漫画に掲載された「言説」を筆者自身が分析した書籍です。近代社会において成立した恋愛＝結婚というロマンティック・ラブが、現代においてどのように変容したかが描かれています。